

中国におけるプロテスタント教会の 先駆的動向

徐 亦 猛

序

中国の長い歴史の中、西洋のキリスト教は幾度も中国文明と遭遇し、多くの意義深い思想交流が現れた。しかし、数世紀にわたる努力にも拘らず、キリスト教は終始中国文化の頑強な抵抗を受け、今日までキリスト教が中国において根を下ろし、実を結ぶことができなかつた。そこには様々な要素がからみ合っているが、その原因を歴史研究の顧みによって明らかにすることによって、私たちはキリスト教と中国の歴史、社会、伝統文化の関係について、一層深く考えることができるのである。

19世紀以来、世界は日に日に分散から統合に向けて進展してきた。西洋植民地主義の拡大と衝撃のもと、中国など遅れた非西洋国家は、相次いで世界体系に取り込まれた。この過程において、多くの非西洋国家は西洋国家の植民地ないし半植民地となった。それと同時に植民地ないし半植民地となった国々には、新しい外来の文化的影響のもとで、経済の変化が生じた。多くの国はこのような背景のもと、近代化の道を辿り始めた。

以上の外来の影響の中でも、西洋の宣教事業は軽視できない要素の一つである。近代の特殊な宣教的背景及び西洋の宗教思潮の変遷において、中国における近代キリスト教¹宣教事業は宗教と世俗との混合の事業として、諸部分の結合によって形成された。鮑哲慶は「もしキリストがかしらであり、教

¹ 中国のキリスト教史研究において、キリスト教 (Christianity) については、広義と狭義に分けられる。広義のキリスト教は正教会 (Orthodox)、カトリック (Catholic)、景教 (Nestorians)、プロテスタント (Protestant) など幅広い各教派を含んでいる。狭義のキリスト教はプロテスタント (Protestant) だけを指している。本論文では、キリスト教をこの狭義の意味で、プロテスタントに限定して論じたい。

会が中心であるならば、キリスト教病院と青年会は両手であり、学校と慈善機構は両足である。宣教という目標のもと、伝道、教育と医療事業は相互平行して進む²と説明した。この説明では、伝道事業、教会教育事業、教会医療事業、慈善事業が取り上げられているが、鮑は教会による文書伝道事業を見落としている。しかし、中国におけるキリスト教宣教事業は、伝道、教育、医療、慈善、文書事業によって構成されていたのである。これらの事業は統一的な目標をもって、西洋列強の庇護の下、近代中国の各地において広く発展し、大きな影響を及ぼした。香港の李志剛は「多くの新しい研究のデータから見て、キリスト教は中国に伝来して以来、中国の近代化と緊密な関係を結んだ。近代的教育観念と制度の輸入や、新聞事業の提唱や、女性の社会的地位の引き上げから、医学、農業、科学技術に至るまで、各方面において、宣教師および中国キリスト者の参与と貢献が現れた³と近代中国に対するキリスト教の貢献を評価している。

初期のキリスト教宣教活動はある程度の成果と評価を得たが、その一方で、大きな代価を払った。特に中国近代以来、キリスト教は帝国主義の武器と共に中国に入り、色々な不平等条約によって中国で合法的地位を獲得した。そのことが原因で、中国人は初めからキリスト教に対して反感を持ち、中国民衆の間でキリスト教は「洋教」と呼ばれた。様々の面において民衆の抵抗があったので、宣教は非常に厳しいものであった。本論文は19世紀から20世紀初頭までの中国のキリスト教の動向を焦点に合わせ、その時代の宣教の歴史と特徴を解明する。

一、19世紀におけるキリスト教の動き

最初のプロテスタント宣教師R. モリソン（馬禮遜 Robert Morrison）は、1807年に中国に到着した。1805年には清朝政府はカトリック信徒に対する大弾圧を行っていたので、モリソンの宣教活動は最も困難な状況において開始されたと言える。すなわち、当時清朝政府から見れば、カトリックもプロ

² 陳澤民『医院宗教事工會議特刊』、中華医学会教会医事委員会出版、1950年、17頁。

³ 李志剛『基督教与近代中国文化論集二』、宇宙光出版社、1993年、21頁。

テスタントも、キリスト教であることにおいては何の違いもなく、宣教活動に厳重な制限を課せられることとなった。このような厳しい状況のもと、モリソンは東インド会社の中国語通訳として広州に赴き、滞在中彼は独学で中国語を習得して聖書の漢訳を始めて、中国における宣教の基礎を築いた。1814年には同じく倫敦会から派遣されてきた宣教師W. ミルン（米憐 William Milne）が、モリソンの協力者として共に新約聖書の漢訳を完成させた。その翌年にモリソンの指示のもとに、ミルンはマラッカで初めてキリスト教主義学校を開き、1818年には本格的な高等教育機関として英華書院 (Anglo-Chinese College) に成長した。華僑に対する西洋文化の教育と福音宣教を行う一方、印刷所を設けて1823年には新旧約聖書の漢訳⁴を完成して出版した⁵。その後、モリソンの継承者としてウォルター・ヘンリー・メドハースト（麥都思 Walter Henry Medhurst）、ギュツラフ（郭實獵 Karl Friedrich August Gutzlaff）、ブリッグマン（裨治文 Elijah.C.Brigman）、J. モリソン（馬禮遜二世 Junior Robert Morrison）などは、モリソンの漢訳を基礎として、様々な訂正を付け加えて新たな漢訳聖書を出版し⁶、また中国の古典『三字経』、『孝経』などの英訳や西洋の讃美歌の中訳などの出版活動を行った。

倫敦会のほか、公理会、浸礼会、聖公会などの宣教師も、中国において積極的に出版活動や医療活動を展開した。初期中国プロテスタント宣教は、各宣教会の宣教師の努力により中国南部においてその先駆的な基礎が形成された。そして文書伝道、教育宣教を中心とする地道な形態においてではあったが、宣教事業は次第に成果を挙げ、それらは相次いで中国に來た宣教師にうけつがれて展開されていったのである⁸。

その後、アヘン戦争（1839-42年）によって情勢は急激に変化した。アヘン戦争において清朝が完全に敗北し、結局清朝政府は西洋列強とやむを得ず不平等条約「中英南京条約」（1842年）を結び、外国人と通商する港で教会を設立する権利を与えた。更に1858年の「天津条約」の締結交渉中に宣

⁴ 1823年出版した新旧約聖書の漢訳は『新旧遺詔全書』と呼ぶ。

⁵ 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006年、14頁。

⁶ 1840年版『神天新旧遺詔全書』、1853年版『新約聖書』、1868年版『旧約聖書』など。

⁸ 吉田寅「中国」『アジア・キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局（編）日本基督教団出版局、1991年、147頁。

教師に中国内地で土地を購入することを認める条項を加え⁹、1860年以後中国において宣教活動が大きく展開されるようになった¹⁰。各国と中国の間で結ばれた不平等条約は、領事裁判権という特権を含んでいた¹¹。中国政府からの監督を受けることなく、キリスト教は中国政府から容認された¹²。不平等条約によって、一部の宣教師たちは最大限自己の利益を守り、自由に中国で宣教活動を展開した。当時、仏教、道教、イスラム教などの宗教は依然として政府の管理の下に置かれていたので、中国におけるキリスト教の位置が特別であることが一目瞭然となった。その状態は、1945年に不平等条約が廃止されるまで続いた。

その社会情勢のもと、1841年に太平天国の乱が起こった。太平天国の乱は、キリスト教の色彩をもった宗教的結社の運動として始まったが、間もなく狭い意味での革命の運動に変わった。太平天国の乱の指導者洪秀全は、反乱が起きるより以前に、いくらかキリスト教に触れていたことは確かである。しかし、この反乱全体をよく見て、その指導者たちの常軌を逸した不道德な行動を考えると、これがキリスト教の運動ではなかったということは、疑う余地もない。学者は「キリスト教の内面的な精神を、暴徒はほとんど、あるいはまったく、何も知らなかったのである」¹³と批判した。

19世紀はちょうど西洋文化が他の文明に対して圧倒的な優位を確立した時期であり、宣教師たちは、自国の文化の優位性を自負し、中国の文化を時代遅れの愚昧で頑固なものに見なしていた。彼らはいわば救世主の立場に立って、こうした自分の信仰理念を中国人に強引に押し付けた。また、彼らは道徳の改革者と自称し、「罪や穢れだらけの中国を浄化する大きな使命」¹⁴

⁹ 「中英南京条約」の後、1844年中国とアメリカの間で「中米望厦条約」を結んだ。(その中アメリカ宣教師に中国で教会を建てるとの特権を与えた。同年12月8日フランスも本国カトリック教徒を保護する特権を得た。「天津条約」によって、イギリス、アメリカ、フランス、ロシアが中国に植民地支配を更に深めた。

¹⁰ 1855年宣教師 Williams, Samuel Wells は天津条約の交渉に参加した。条約の中に宣教師と中国信徒の安全を保護するという条項を付け加えた。

¹¹ 領事裁判権は在中外国人の法律案件について各国の領事官が中国境内において各国の法律で処理する特権を指す。外国人は中国の法律で裁くことができない。

¹² 羅冠宗編『前事不忘、後事之師』、宗教文化出版社、2003年、40 - 55頁。

¹³ K.S. Latourette, A History of Christian Missions in China, Cheng-wen Publishing Co., Taipei, 1966, p.297.

を持ち、この目的を達成するため、単にキリスト教を宣教するだけではなく、西洋文化を以って中国文化を征服しなければならないと考えた。このような中国文化に対する敵視、軽蔑的な態度によって、宣教する側と宣教される側の対立がますます深くなったので、中国人は全力でキリスト教の伝来を阻止しようとしたのである。

公理会の宣教師における中国華北地方の教会の調査報告によると、当時ちょうど日清戦争（1894-95年）の後で、多くの宣教師は自分の任務が福音によって中国人の靈魂を征服するという狭い観念を抱き、中国の文化や知識人などのことを全く理解することなく、結局、自分の活動の範囲が狭かったということである¹⁵。彼らは当時の政治情勢や時代に対応することもできなかった。

更に、宣教師たちは現地の郷紳¹⁶との対立によって、宣教活動は一層困難となった。従来清朝地方の郷紳の中には、科挙¹⁷試験に合格して、中央政府である程度功名を得た者もいた。彼らはその地方に長い間住み、現地の人の生活状況も十分認知した。ある人は現地の地主であり、税金の免除の特権を持ち、又、ある人は政府の準役人であって、国から給料をもらい、現地官員と住民の間でかかわり合うのが仕事である。その人たちはいわば地方において政治戦略性ある人物である。彼らは地方官員を助け、命令を下すと同時に住民のために地方官員に助言し、場合によっては住民のために上告する。地方官員は通常ほかのところから来たもので、任期は短いのである。その点で地方の郷紳はいかに重要な位置を占めていたかが推測できる。

地方の郷紳は多様な職務を務めており、公共福祉事業の務めを果たしてい

¹⁴ Yip Ka-che, Christianity and Imperialism- The Chinese Case, Asian Forum, 6:4, 1974, pp.1-11.

¹⁵ Sidney A. Forsythe, An American Missionary Community in China 1895-1905, Cambridge: Harvard University Press, 1971, pp.33-35, 42-44, 89.

¹⁶ 中国の明清時代の地方有力者。現職・休職・退職を問わず郷里の官僚を呼んだことは、郷紳の語は宋代からあるが、社会階層として重きをなすのは明代中期以後からである。彼らは官僚の徭役免除の特権を利用し、土地兼併を行って、郷里の大地主になるとともに、その配下の奴僕を駆使して、高利貸、農産物の投機販売・不動産取引など商業活動にも手を染めた。また門下や家僕を胥吏や衙役として地方官衙に入りこませて徴税・裁判・治安維持・救恤などの地方政治を左右した。地方官も彼らを無視できない存在となった。

¹⁷ 科挙とは、中国漢代に起源をもち、隋・唐代から始まって清末まで続いた、官吏登用試験である。当時本色化運動の指導者の間に、科挙試験に合格したのは非常に珍しかった。

る者、公共建設、税収の管理、学校、地方のお寺の維持と修理に貢献している者、更には科挙試験場の管理、緊急状況の時地方の治安を維持する自衛団を組織する者もいた。地方の郷紳は地方官員と非政府の代表である¹⁸。

不平等条約の下で、西洋宣教師が地方の郷紳と同じ地位を得られて、政府の軍事顧問を務め、現地の住民に西洋の思想を教えている。従って、宣教師の活動は、いつも伝統文化を守ろうとする郷紳を脅かしていた。更に宣教師の働きによって、中国人信徒は中国社会から離脱し、宣教師の働きを助けている。実際、多くの公共福祉事業に関わり、例えば貧しい人を救済、孤独の未亡人や老人の保護など、宣教師と郷紳は互いに競争し合った。中国の郷紳と民衆にとって、「キリスト教は異端邪教であるゆえ、中国の数千年の礼儀、道徳、倫理を覆すこととなった。このような企みは中国社会全体の風習を脅かす行為である」と非難している¹⁹。そのため、郷紳たちはキリスト教が中国文化に反することを小冊子にして、住民に反キリスト教意欲を種として撒いたり、チラシや布告を配り、宣教師の行動を批判したり、反キリスト教運動を奨励したりした。特に科挙の時期、試験に参加する若者が集まった時、以上のような活動を行った²⁰。このような不安な状況の下に、反宣教師の意欲が高まった。1860年から1899年まで宣教師と中国信徒に対する攻撃事件は240件にも及び、その中55件は1860年から1870年まで起っている²¹。

19世紀の後半において、中国各地で反キリスト教風潮の盛り上がり与中国人民族意識の変化によって、中国におけるキリスト教の宣教戦略の変化は外部からの促進力となった。そして長年中国で活躍した友好的見識のある宣教師たち自身も、その宣教理論の一つの挑戦として、中国で三自の教会（中国人主体とする教会）を建設しなければならないと認識し、全面的に支持した。その宣教師たちは中国に滞在時間が比較的長く、中国文化と伝統にある程度の理解を示してきた。彼らは中国民衆による反侵略、反列強の民族主義に同

¹⁸ Chang Chung-li, *The Chinese Centry-Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society*, Seattle: University of Washington Press, 1935, pp.32-41,43-72.

¹⁹ 王文傑『中国近代史上的教案』、協和大学中国文化研究会、1947年、14頁。

²⁰ Paul A. Cohen, *China and Christianity: The Missionary Movement and the Growth of Chinese Antiforeignism, 1860-1870*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1963, pp.100-107.

²¹ Cohen, *ibid.*, pp.82-85. John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer, and Albert M. Craig, *East Asia: The Modern Transformation*, Boston: Houghton Mifflin, 1965, pp.333-334.

情し、中国人信徒の見識、覚悟、勇気と独立精神を尊重することこそ、キリスト教が中国において発展できると認識した。彼らも、キリスト教運動の指導権が西洋の宣教協会から中国の教会へ移行すべきだと考えた²²。

19世紀末、各教派の宣教協会は宣教師を中心とする伝統的宣教モデルの下に、中国のキリスト者の人数も徐々に増えていた。これを数量的に見ると以下の表の如くである²³。

西暦	信徒
1814	1
1833	3
1853	351
1863	1,974
1865	3,132
1873	9,715
1876	13,035
1889	37,287
1900	85,000

このような数量的変化は伝統的宣教モデルの結果と言える。西洋各教派の教会は中国へ宣教師を派遣し、そして各教派は本国で集めた宣教資金を中国でミッション・スクールの設立、医療宣教などの事業を通して、キリスト教を中国人へ浸透させて信徒の数を増やすということである。この宣教モデルの過程において、宣教師たちは中国人信徒を助手として雇い、宣教活動を促進したが、宣教師は全て宣教活動の中心であり、現地の信徒はいつまでも補助の地位に置かれた。更に、一部の宣教師にとって宣教は唯一の働きであり、全て宣教協会を中心として宣教活動を展開し、中国の教会の自立や本色化に対して、全く関心を示さなかった。彼らは本国からもっと多くの宣教師たちを中国へ派遣することや、多くの宣教経費を受けて、中国人信徒を助手として雇うことを期待していた。しかし、結果としては、多くの中国教会は外国の宣教協会と宣教師に頼りすぎになり、その中で一部の信仰動機不純の人（Rice Christian）がキリスト教に入った。そういう人たちは、お金を目

²² Preface, in Rev. Frank Rawlinson(ed), China Christian Year Book, 1926.

²³ 山本、前掲書、19頁。

当てに、宣教もせず、宣教師の勢力を借りて自分の同胞を圧迫したりして、中国民衆の間において非常に悪い影響を及ぼした。同時に、宣教師たちは中国人信徒の自立精神を育成しないため、中国人信徒は教会に対する責任感と義務感を感じなくなった。そのような背景の下に、中国のキリスト教界からこのような宣教モデルに対して本当の宣教運動の主旨に適さないという疑問が生じた。多くの者は中国におけるキリスト教宣教は宣教師を中心とする時代から中国人自身が活動する時代へ、中国の教会は宣教師を頼るよりも自治 (self-governing)・自養 (self-supporting)・自伝 (self-extension) へ替えるべきとし、キリスト教も中国社会へ根を下ろし、中国文化の背景の中に認められる宗教になると考えた。

自治・自養・自伝は中国の教会の専有理念ではない。近代における欧米の海外宣教運動は地域に広く関わる世界的運動であり、アジアやアフリカなどキリスト教世界以外の地域はその宣教運動の対象である。宣教師たちが中国で遭遇した問題や困難は、他の地域においても同様であった。宣教運動の規模の拡大と共に、西洋の宣教協会の経済的負担も次第に大きくなり、そのことが、経済面において西洋の宣教協会に頼らないで教会が自養を促進する直接的な原因であった。宣教地における教会の自治・自養・自伝という理念を最初に提起したのは、アフリカへの宣教師として派遣された英国聖公会のヘンリ・ヴェン(亨利・樊 Henry Venn)であった。1841年、宣教協会が大きな経済問題に直面した時、ヴェンは宣教地の教会における牧師の任用や宣教地の教会の自養の実現などの問題を提起した²⁴。それ以後、彼はこの主張を展開し、自養、自治、自伝という「三自」の宣教理論を形成した。1860年のリバプール宣教会議において、多くの参加者はヴェンの「三自」の宣教理論に賛同したことからも、その当時、相当の影響力を及ぼした考えでもあると推測できる²⁵。ヴェンと同時代の米国公理会(ABCFM)の宣教機構責任者ルーファス・アンダーソン(安路福 Rufus Anderson)も、1841年の米国公理会(ABCFM)の年度報告において、宣教活動を通して宣教地の教会指導者を育てることに注目しなければならないと類似した考え方を提案した。彼は、

²⁴ C.Peter Williams. *The Ideal of the Self-Governing Church*, Leiden: New York, 1990, pp.3-4.

²⁵ *Ibid.*, p.24.

宣教地における按手礼式に言及しつつ、「このようにして、福音はまもなく現地で土着化し、福音施設は神の恩寵を通して自立と自伝のエネルギーを獲得した」と叙述している²⁶。1848年の年次報告でも、米国公理会(ABCFM)幹事の署名入りで同じ関心が示され、宣教地の教会に関しては、「どこまでこの国の全ての団体の権限から独立すべきであるか、自養と自立に向けてどのように訓練されるべきか……宣教師が教えるべきことと宣教協会の性格に関して、米国公理会の責任は何か」という問いかけが行われている²⁷。

ヘンリ・ヴェンとルーファス・アンダーソンが提起した「三自」の宣教理論は、19世紀後半のプロテスタント宣教運動の主流思想となっただけではなく、世界の各宣教地においても実践された。そして、1900年にニューヨークで開かれた宣教会議において、本色教会の自養の問題は更に注目された。この会議中、世界各地からの宣教師たちは「本色教会の自養」を主題として取り上げ、積極的な討論を行った。米国メソジスト教会のジョージ・ウイントン(喬治・温頓 George B. Winton)は宣教についての原則をまとめ、「宣教資金は宣教師自身の宣教活動に限定して用い、宣教地の信徒に教会の財政を負担するように最初から教えて宣教地教会の自養を実現させる」²⁸と述べている。ニューヨーク宣教会議の大きな成果として、全世界の宣教団体は宣教地の教会の自養の実現を宣教の基本原則として認識し、実行することに合意している。

1877年5月に上海において第一回プロテスタント宣教師全国大会が開かれ、その大会において特に注目されたのは宣教地教会の「自養」についての問題であった²⁹。中国にいる宣教師たちは1860年のリバプール宣教会議の「三自理論」を踏まえて、教会「自養」の問題について熱心に討論した。アメリカのメソジスト教会の宣教師は「本色教会の自養」について講演し、その冒頭において、「本色教会を一刻も早く実現しなければならない。私たち宣教師の責任としては自分の権限の範囲内に実現させ、良い結果に達するために

²⁶ Pierce Beaver, To Advance the gospel-Selections from the Writings of Rufus Anderson, Grand Rapids, William B. Eerdmans Publishing Company, 1967, p.103.

²⁷ Ibid., p.122.

²⁸ Ibid., pp.289-324.

²⁹ 山本、前掲書、26 - 27 頁。

努力すべきである。このことについて宣教師はだれも反対すべきではない。教会の自養を実現することこそ、本当の本色教会と言える。外国の資金に頼るばかりの教会は現地の人々から疑いの目でみられる」と述べている³⁰。更に、彼は宣教地の教会へ資金援助する従来の宣教協会の宣教方法を、「従来の宣教モデルの下にキリスト教はねじ曲げられたものとなり、発展が遅れるのである。このような訓練を受けた中国のキリスト者は最初から西洋の教会の資金の豊富であること、西洋の教会は中国の教会を助けるために喜んで献金を捧げるという誤った理解をしている」と厳しく批判し、また「宣教師は宣教資金を使って宣教助手を雇うことを慎重にしなければならない。適切な宣教地の人を雇い、彼らの同胞に宣教する。一旦キリスト教へ入信し教会の会員になった時から、彼らへ自分の能力に応じて福音宣教へサポートする習慣を育てるべきである」と³¹訴えている。東洋固有の文明を発揚し、一刻も早くキリスト教から『洋教』という悪名を取り除くために、20世紀以後、中国教会を自立させることは、宣教師と中国人教会指導者との共同目標であった。

二、20世紀初期における中国キリスト教の発展

20世紀初頭において、中国で最大規模の反キリスト教事件は義和団の乱であった³²。この事件はキリスト教と直接に関係しており、19世紀後半から中国における反キリスト教活動の最高潮とも言える。義和団の乱の中心は「扶清滅洋」（清朝を助け、西洋列強とキリスト教を滅ぼすこと）であり、実際に清朝末期の外部世界からの侵略と内部社会からの危機の爆発によってもたらされている。

義和団は19世紀末山東省において形成され、最初は反清朝政府の性質を

³⁰ S.L.Baldwin, *Self-support of the Native Church*, Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, Shanghai; Presbyterian Mission Press, 1877, pp.283-284.

³¹ *Ibid.*, pp.287-288.

³² 陈旭麓編『義和団運動』、上海人民出版社、2001年；中国史学会編『義和団』、上海人民出版社、2000年；中国義和団運動史研究会編『義和団運動与近代中国社会』、四川社会科学院出版社、1987年；廖一中編『義和団大辞典』、中国社会科学出版社、1995年；三石善吉『義和団運動の光芒』、中央公論社、1996年；佐藤公彦『義和団の起源とその運動：中国民衆ナショナリズムの誕生』、研文出版社、1999年など参照。

持つ民間秘密結社であった。その後、清朝政府に利用され、山西省にまで活動が展開された。1900年に清朝政府の指図によって、義和団は北京の外国大使館とキリスト教礼拝堂を包囲攻撃し、山西、奉天、内モンゴルなどにおいて宣教師とキリスト教徒を殺戮したが、結局西洋の八国連合軍によって鎮圧され、敗北した。統計によると、義和団の乱において犠牲になった宣教師は241名、キリスト教徒23,000名であったが、八国連合軍によって殺された義和団の信徒はキリスト教側の倍以上のものほっている³³。

義和団の乱は、中国におけるキリスト教発展の転換点でもあり、その後の20年間は、中国におけるキリスト教の高度成長期とも言われた。その原因としては主に三つ挙げられる。

第一には、1900年の義和団の乱以後、各宣教団体は以前の宣教戦略を反省して、中国民衆と関係を改善することにより宣教効果を上げることを願ったことが挙げられる。宣教師たちは中国民衆のキリスト教に対する深い恨みを分析し、中国においてキリスト教宣教を成功させるため、先ず民衆の好感を得なければならぬと認識した。ある宣教師は、「中国社会においてキリスト教の足場ができるために、先ず民衆から認められ、敬慕と称賛を受けなければならないし、中国人の教会を育てるべきである³⁴」と述べている。その点から見れば、やはり宣教師は地方政府との友好関係を結び、その行政面において干渉しないだけではなく、中国人キリスト者の信仰の質を高めるために力を入れることに努力した。

そのような宣教戦略の変化は、1907年に上海で開かれた第三回のキリスト教全国大会（1807年のモリソン渡来を記念として宣教百年記念会議）において顕著に反映され、1890年の第二回のキリスト教全国大会より参加者が三倍に増えた。またその大会では、中国人教会についての宣教師の関心が以前の会議よりも強く現われ、「中国の教会」「中国人の宣教」などの主題で討論が行われた。更に、一部の宣教師は中国人教会を離れては真の意味での宣教はなし得ないと考えた。すなわち理想的な宣教としては、その国の人々

³³ 王治心『中国基督教史綱』、上海古籍出版社、2004年、193頁。

³⁴ 中華總行委辦會調查特委會編『1901-1920年中國基督教調查資料 上巻』、中國社會出版社、2007年、125頁。

による宣教、その国民の血を有し、その伝統文化の中に育ち、被宣教者と同じ悩みや楽しみを持つ人によって、その国の言葉で語られることが是非とも必要であるという認識である³⁵。また、宣教師は単なる道徳と霊的使命だけを持ち、如何なる政治的目的をも持たず、民族主義高揚の時期において、中国の政治に干渉せず、民衆の革命運動に利用されずという方針を決めた。全体から見れば、宣教師は清朝政府及び民衆との関係と態度を改めて大きく変化させた。

同時に、中国人にキリスト教を宣べ伝えやすくするため、宣教師は単にキリスト者増加の数だけを求めず、信徒の質を重視するように方向転換した。これを数量的に見ると以下の表の如くである³⁶。

西暦	信徒数	増加人数	増加比率
1889	37,287		
1900	85,000	47,713	127.96% (11年)
1906	178,251	93,251	109.71% (6年)
1910	172,942		
1913	207,747	34,805	20.13% (3年)
1914	235,303	27,556	13.26%
1915	268,652	33,349	6.64%
1916	293,139	24,487	9.11%
1917	312,970	19,831	6.76%
1919	345,853	32,883	10.5% (2年)
1920	366,524	20,671	6.27%

しかし、この表から見れば、1889年から1900年までの10年間に於いて、キリスト者の増加率は倍以上であり、また1900年から1906年までは約倍ぐらゐの増加率が保たれたが、1906年から1920年までの増加率は減少していることが判明される。英国宣教師ギブソン（汲約翰 J.Campbell Gibson）はキリスト者の増加率が落ちた原因について、「社会的不安定要素以外に、もう二つの原因に注目すべきである。一つは、中国人キリスト者の霊的な生活が次第に向上し、信仰に分別のないキリスト者が減少しつつ、全体の信仰的

³⁵ 山本、前掲書、29頁。

³⁶ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、139頁。

な質が高くなっている。もう一つは、教会はキリスト者の基準に対して高く求めた故、一部の入信動機不純なキリスト者は教会から離れたことが挙げられる。勿論、過去の統計的数字だけで全体の真相を十分には反映できないが、中国人キリスト者の霊的質が高められたことは否定できない事実である」³⁷と分析している。

教会がキリスト教教育を重視することも宣教戦略における変化の一つであった。1905年に清朝政府は科挙制度を廃止したが、従来は、知識階級の優秀な青年たちは科挙の試験に合格するために勉強してきた。科挙は、政治的経済的社会的に官僚として登用に連なる道であったので、いかに高度の欧米式の教育機関がつくられたとしても、科挙に無関係である限り、中国の優秀な青年たちの関心と呼ばなかった。しかし、1905年の科挙制度の廃止によって、優秀な青年たちがキリスト教主義の大学に注目するようになり、宣教師と西洋の宣教協会は一層キリスト教教育に力を注いだ。多くの宣教師は中国に派遣され、中国人指導者と共にキリスト教主義の大学の宣教のために働いた。更に宣教協会は清朝政府からの賠償金の一部を利用して、キリスト教主義の大学を創ったり、中国人教会指導者を留学させるための基金を創ったりした。20世紀初期において、信徒に知識人が増加し、指導者が充実されてきて、教育宣教事業が中国宣教において大きな役割を果たしたということは容易に肯けるところである。統計によると、宣教師と中国人職員が半分以上教育伝道事業に携わっていた。「一万人以上の中国人職員は全時間を教育伝道事業のために捧げたが、それ以外に3千名の外国の教育宣教師もこの事業に加わった。中国におけるキリスト教教育事業は本当に大規模な働きであった」³⁸と。このような宣教方式は、一貫して教育を重視する儒教伝統に合致した。このように西洋の宣教協会がキリスト教教育事業を通して、中国で有効的に宣教ができ、中国教会のために人材を育成することもでき、キリスト教発展のための相当の実力をつけた。

³⁷ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、140-141頁。

³⁸ 『1901-1920年中国基督教調査資料 下巻』、888頁。

全国キリスト教主義学校在籍学生数³⁹

西暦	学生数
1876年	4,909
1889年	16,836
1906年	57,683
1912年	138,937
1915年	172,979
1916年	184,646
1917年	194,624
1918-1919年	212,819
1920年	245,049

宣教師は、「10年、20年前に多くの宣教協会はキリスト教教育宣教事業について態度を決しかね、教会内部の日曜学校の教育だけに注目して満足していたが、明らかにそのような考えは現在の社会状況に適合していなかった。教会としては、内部の青年たちだけを育てるのではなく、大学、中学校、小学校の教育を通して、教会外の青年たちをも育てなければならない。このように教会にとって良い指導者の人材を確保でき、教会の運命とも緊密な関係にある⁴⁰」と評価した。このような宣教戦略の変化によって、キリスト教が以前より中国の社会に大きな影響を与えたのである。

それだけではなく、1910年6月にエディンバラで開催された世界宣教会議において、その第1部門において、宣教師たちは「宣教地における教会」という主題のもとに、熱心に討論した。宣教地のキリスト教化は、その国のキリスト者によってなされるのが最も効果的なのである⁴¹。それゆえ、討議資料が明白に述べているように、宣教活動の重要課題とは、「どこにおいても、人間の心に対してキリストが彼らの救い主だと説くこと」と同時に、宣教地に教会を建て、指導者を育て、その教会が「三自」を達成できるよう導くことなのである⁴²。ここには、G. ヴァルネック（華倪克 Gustav Warneck）に代表される「教会の植え込み」（plantatio ecclesiae）という宣

³⁹ 『新教育』、第5巻第4号、1922年、26頁。

⁴⁰ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、135-136頁。

⁴¹ WMC, Carrying the Gospel to All the Non-Christian World, Report of Commission I, p.318, p.368.

⁴² Ibid., p.312.

教理解が強く反映されていると言えるだろう⁴³。エディンバラ世界宣教会議は、後にエキュメニカル運動で活躍する人々を集めて靈感を与え、国際的で超教派的な宣教協力の関係を維持する継続委員会を設立した。「エディンバラ継続委員会」の主な活動は、エディンバラ会議の精神を維持して、欧米諸国の宣教協会の連合組織の設立や、宣教師たちと現地の教会の協力機関であるキリスト教連盟の設立を促すことであった⁴⁴。エディンバラ会議において、欧米教会における現地の宣教は、従来に対立や孤立で活動していた各教派による単独宣教時代から、教派、国籍、人種を超えて協力関係を築く時代へと転換したのである。

エディンバラ世界宣教会議の影響によって、中国における各教派は合同・一致の道へ進むことを強調した。この宣教戦略の変化によって、中国に存在する各教派は、協力し合って宣教活動を促進したので、中国におけるキリスト教はある程度大きく前進した。1912年から1913年にかけて、継続委員会の議長 J.R. モット（穆德 John R.Mott）が中国、日本、インドなどアジア各地を訪問し、宣教師と現地のキリスト者両者の参与による宣教会議を相次いで開催している⁴⁵。その会議をきっかけとして、各国キリスト教協議会（National Christian Council: NCC）が設立された。これらの各国キリスト教協議会は、各国内で合同教会の設立を促したばかりでなく、他国の NCC や宣教会議との間の媒介的な組織となったのである。特に、1913年、モットが中国に訪問し、様々な会議を開き、「成長している中国教会団体はあらゆる方面の問題を成功的に処理するため、各国の宣教師及び中国の職員たちは根本的に明確な統一計画と有効的な協力を求められることを確信しなければならない」⁴⁶と語った。すなわち、理性をもって有効的な発展計画を作り、あらゆる面において中国の宣教状況を理解するのである。そのため、1913

⁴³ 村瀬義史「宣教における教会間のパートナーシップの一考察—戦前の世界宣教会議における「若い」教会と「旧来の」教会との関係を通して—」『神学研究』、第52号、関西学院大学神学研究会、2005年、230-231頁。

⁴⁴ J.R.Mott, At Edinburgh, Jerusalem and Madras, International Review of Missions, Vol.XXXII, 1938, p.301.

⁴⁵ 神田健次「草創期の現代エキュメニカル運動」『神学研究』、第38号、1990年；神田健次「基督教教育同盟会の設立とエキュメニカル運動」『神学研究』、第55号、2008年を参照。

⁴⁶ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、1頁。

年の全国キリスト教会議において、中華統行委辦会が成立され、中国キリスト教各事業について全面的な統計調査が行われた。1919年12月に中華統行委辦会執行部は上海の天安教会において、「中華婦主運動」を組織した。この運動の参加者117名の中、中国と西洋の代表者数は半々であり、その参加者は、「国籍が異なり、教派も異なるが、心を一つにして、キリスト教をもって中国を救うという決心は同じであった」⁴⁷と報告されている。この運動は、キリスト者の信仰を深めること、キリスト教教育を家庭・学校・教会において強化すること、中国人キリスト教指導者の要請、信徒の識字教育、未信者に対する伝道などを含んでいる。更に、この運動を通して、中国人会員の比例を以前の三分の一から二分の一まで引き上げ、中国人が総幹事の役職を負うことを決定した。

第二に、義和団の乱以後、中国の政局はキリスト教の発展にかなり有利に展開し、キリスト教は比較的重要な社会的役割を果たし、中国の社会から少しずつ受け入れたことが指摘できる。

清朝政府の保守勢力は、義和団の乱以後に大きな打撃を受け、国内外の圧力によって、清朝政府は改革を行わざるを得なかった。例えば、1905年に科举制度を廃止し、公費留学生を日本に派遣して新しいタイプの知識人を育てた。これらの新しいタイプの知識人が古いタイプの知識人と違う点は、彼らが西洋の教育を受け、国内の科学と民主主義を推進する先駆者となって様々な運動を指導し、中国社会の巨大な変化を促進させた点にある。宣教師のロウリンソン（楽靈生 Frank Joseph Rawlinson）は、中国社会の変化とキリスト教の発展状況について、「1900年以後の20年間において、中国は明らかに革命の傾向に進めている。全ての古い原則と制度が改められ、代わりに新原則と新制度が求められ…その変化の中、国民性の変化が最も注目すべきであろう。このような変革は将来の更なる変革の前兆である。中国は世界の改革の潮流の影響を受けつつ、全世界へ影響を与える」⁴⁸と分析している。これらの変革は、キリスト教と緊密な関係を持っている。具体的に言えば、第一は民族主義精神の発展である。1900年以後、封建専制政体は崩れ、

⁴⁷ 「致全国同道書」『中華婦主—中華婦主運動通告書』、1920年、1頁。

⁴⁸ 『1901—1920年中國基督教調查資料 上巻』、121頁。

中国民衆の固有の民主精神は専制制度を突き破り現れた。辛亥革命の成功はこの新精神の典型的な表現であった。第二は、罪惡に対する抵抗運動であり、特に1908年のアヘン禁止運動は、すさまじい道徳力と悪勢力との戦いであった。そのほか、纏足反対運動も中国各地において展開された。第三は、知識革命と改良教育運動であり、1905年に民衆が科挙制度の廃止や普通教育の普及などについて清朝政府に嘆願書を出した。第四は、白話文⁴⁹運動であり、文語は国民教育にふさわしくないと見なし、北京語を国の共通統一言語として普及する運動を推進している。第五は、経済独立運動であり、新しい中国式の銀行を設立している。本来の目的は西洋銀行の排斥であったが、目標を達成できなかった。第六は、商人階級の現れと政治に対する興味の増加によって、地方政府と地方自治勢力が発展し、中央政府の権限を弱めたことである。そして第七は、信仰自由の発展である。

これらの変化において、キリスト教は促進の役割をかなり果たしている。ロウリンソンは「これらの変化は、一見すると教会自身が積極的に活動した結果と見えるが、実際にはキリスト教が文化面において発揮した努力のたまものである」⁵⁰と指摘した。キリスト教が直接に活動した結果か、それとも文化面を通して発揮した影響か、中国の社会的な変化は確かにキリスト教と緊密な関係があることを否定できない。例えば、中国の民主政治を促進する面から見れば、孫文が指導した辛亥革命に多くのキリスト者は貢献し、罪惡抵抗運動においても、教会は様々な組織を立ち上げ、積極的に当時の社会問題解消のために役割を果たした。知識革命、科挙制度の廃止及び白話文普及運動において、多くのミッション・スクールは積極的に貢献し、1910年に教会から出版された白話文聖書は今でも中国教会で使われている共通版である。また、各地のキリスト者は地方政府と協力して、北京語を普及させ、地方の人々と共に道徳、医療、教育、被災者の救済及び公共衛生事業にも力を注いだ。更に、1907年の第三回キリスト教全国大会において、宣教師たちは信仰の自由を訴えたが、中華民国成立後、キリスト教は仏教と連合して儒教を国教とする法案に反対し、最終的に1916年に信仰の自由を正式に憲法

⁴⁹ 白話文とは、中国の標準語（北京語）を指す。

⁵⁰ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、141頁。

に盛りこむことができたのである。以上に述べたことから、中国情勢の変化において、キリスト教はある程度の役割を果たし、同時に中国人の間に少しずつ認められたことが理解できるであろう。

第三に、中国キリスト者の民族意識が覚醒され、西洋の宣教協会の支配から離脱することを求めたことである。その原因で西洋の宣教協会は教会を中国人側に移行するべきであることを意識した。

広東汕頭に30年間宣教した英国宣教師ギブソンは、「中国教会」を主題として、「中国にいる宣教師は中国のキリスト教会を建ててのではなく、西洋のキリスト教会を建てて。民族主義の高揚によって、中国の教会は西洋の宣教協会の支配から離れ、宣教協会の資金援助を受けず、中国人自身が管理する自治・自養・自伝の三自教会が求められる。私はこの考えを支持する。実際に、中国社会の変革によって、中国のキリスト者は積極的に様々な社会的変革に取りくむ中、自分の存在価値がこの国の将来に重要な福音的影響を与えると認識した」⁵¹と述べている。この変革の過程において、一部の中国人キリスト者は訓練を受け、立派な教会指導者となった。『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』によると、「一部のよい教育を受けたキリスト者（特に高等教育や海外留学経験のある男女青年職員）の努力によって、教会は全国的により働きをすることができた。勿論、今このような指導者は少ないが、人数と影響は確かに日ごとに増え続ける」⁵²と報告されている。多くのキリスト者は中国社会の変革において民族意識を増大させ、積極的に愛国運動に参加し、例えば、中国人キリスト教指導者の励ましによって、キリスト教学生青年たちは五四運動に加わった。教会指導者誠静怡は、学生たちの愛国行動について、「学生たちの勇敢と犠牲の精神に対して誇りを感じる。民族正義の問題について、教会は回避できない責任をもっている」⁵³と高く評価した。それと同時に、中国人キリスト教指導者たちは、教会の指導権を西洋の宣教協会が握ったことに対して、非常に不満を感じ、「中国のキリスト教は一日も早く洋教という悪名から離れ、西洋各教派は中国での自分の主張どお

⁵¹ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、141頁。

⁵² 同上、129頁。

⁵³ 誠静怡「中国基督教会和全国運動」『教務雑誌』、1919年、456頁。

りにして歩調を合わせない宣教方針は容認できない。外国の勢力は中国におけるキリスト教宣教の主たる障害であり、教会の無力化の間接原因でもある」⁵⁴と批判している。1918年から1922年にかけて年中華統行委辦会実行幹事を務めた一人は、「宣教師の働きはある程度の成績を獲得したが、中国人キリスト者に教会の主人公である意識を教えなかった。これは本当に悲しい事実であるが、これから中国人教会を育てるのは急務である」⁵⁵と論じている。中国人キリスト者の民族意識の増大によって、宣教師たちもこの問題に直視せざるを得なかったのである。

1900年以後の20年間、中国人は少しずつキリスト教に対する態度を変化してきたことが見てとれる。「一部の知識人や社会的地位や財産ある人は、キリスト教に入信した」と言われるように、中国におけるキリスト教の位置は、根本的変化が現れ、キリスト教主義の大学の卒業生は、国立大学の教員や財政界に要職を務めるケースが増え続けたのである。

結論

19世紀から多くの宣教師は、西洋の植民地主義に伴う銃や砲、或いは不平等条約と共に中国に入ってきた。宣教師の傲慢な態度や中国文化を軽蔑的に扱う宣教方式によって、中国の民衆からの強い反発を受け、宣教は非常に難しい状況に陥った。その時期のキリスト教にとって、宣教師はキリスト教教育や医療伝道を通して、宣教活動を展開していくしかなかった。しかし、海外の宣教方式の変化の流れを受け、一部の中国の儒教階級の知識人と親しい関係を持つ思想開明な宣教師は、これまでの宣教方式を反省し、中国文化と融合しながら宣教すること、すなわち、中国の教会を土着化するという思想を抱いたのである。それによって、中国の教会を自立させ、中国人の伝道者を養成することで、中国の教会は大きく発展すると認識した。その意味で、19世紀において、中国のキリスト教の発展を促進したのは一部の宣教師と中国の知識人であると言える。19世紀から20世紀初期において、中国にお

⁵⁴ 『1901-1920年中国基督教調査資料 上巻』、140-141頁。

⁵⁵ 同上、140-141頁。

けるキリスト教が成長したのは、中国人キリスト者の努力の結果ではあるが、その背後にある宣教師たちの支持と協力を看過することはできないと思われる。国内外の情勢の変化によって、19、20世紀初頭の中国におけるキリスト教は宣教事業から土着化事業へと発展し、その際、中国の教会を自立させ、土着化へ向けて促進させた宣教師たちの役割を正當に評価すべきであろう。